

わがまち歴史散歩

池田をめぐる画人たち

第3回「矢野橋村」

今回は、大阪美術学校を創設し、同校を通じて多くの画家を育てた日本の南画界を代表する画家・矢野橋村を紹介いたします。

片腕の画家 橋村

矢野橋村は本名を矢野一智といい、明治23年(1890)、愛媛県今治市波止浜に生まれました。橋村という号は、生誕の地、当時の波止浜(はしはま)村に由来し、「きょうそん」と読まれています。

「大阪美術学校」の設立

24歳でのことでした。当時の大阪の数ある画家の中でも、文展に入選するものはほとんどなく、一躍注目を浴びることになりました。

橋村と池田

御殿山の美術学校閉鎖に伴い、昭和19年の54歳の時、橋村は、豊中市待兼山に転居し、ここに学校の名義を残しました。戦後は自宅(古心庵)で創作活動を再開し、数多くの作品を生み出し、大阪府芸術賞、大阪市民文化賞、昭和36年には日本芸術院賞を受賞しています。また創作活動の傍ら、昭和20年に解散した日本南画院の再興にも尽力し、昭和35年の再興時に副会長、同

39年には会長に推されました。一方、橋村が待兼山に居を構えたことにより、彼を慕う門下生も近隣に居を移しています。池田では、昭和7年、齋藤興里、熊岡美彦によって結成された東光会の委員を務めた大阪美術学校洋画第一期生の胡桃沢源人やラジオの人生相談で「あんなわかれなはれ」のフレーズで有名な日本画家・融紅鸞、また、南画家・福田青藤らが知られています。

橋村の生涯は、昭和40年、享年76歳をもってその幕を閉じましたが、あくなき創作活動、後進の育成、それはとりもなおさず、東京、京都に対する大阪画壇の確立と伸長を目指したものであったといえそうです。

※歴史民俗資料館(五月丘1丁目10-12)では、2月5日(日)まで橋村筆「遠嶺初雪」などの作品を公開しています。開館時間は午前9時~午後5時。1月4日(水)、月・火曜日と祝日、月末は休館です。

このページに関する問い合わせは、歴史民俗資料館(51・3019)へ。



矢野橋村(望月信成編「矢野橋村名作選集」(1975)より)



矢野橋村筆「遠嶺初雪」



矢野橋村筆「漁者農行」

長久三年「摂州細川荘大絵図」(解説)



長久三年「摂州細川荘大絵図」

されたのでしょうか。この点については、その年代が示されていません。使用された紙の質、劣化状態、また、文字の形などによって推定し、これらの状況を総合すると、中世の終りごろまでに制作された可能性が高いと考えられます。

細川荘とは

ところで、本図は摂津の国にあった細川荘という荘園を描いた荘園絵図です。細川荘は、平安時代末期、当時の関白藤原忠実が寄進された荘園の名前です。その範囲は現在の伏見・吉田・古江・東山・中川原・木部など五月山の北側に広がった細河地域にあたるものと考えられています。本荘はその後、近衛家に譲渡され、さらに、寛元2年(1244)近衛家実がその子鷹司院(後堀川天皇中宮)に伝えたといわれています。

また、荘園絵図とは、一般的には古代・中世に造られた荘園に関する地図で、地理的な位置と境界、田畑などの耕地や用水・堤、山・野・河・海、宿や津(港)、家あるいは寺社などの建造物などを描いたものを指します。わが国では、地図制作は江戸時代になって刊行図・手書図ともに大量に制作されるようになります。現存例も数多く知られています。一方、それ以前のものとなると、制作数も現存数も極

ここに記載された「長久三年壬午年」は1042年にあたります。しかし、この絵図がこの年に制作されたというわけではありませぬ。本図の裏書きには文和3年(1354)の記年のある文章が残されています。このころは南北朝時代にあたり、南朝、北朝それぞれが別の年号を採っており、文和は、北朝のものです。むろん、長久3年につくられた絵図に文和3年に新たに裏書きされた想定することもできますが、細川政国という人物が問題になります。政国は、没年が1495年とされる人物で、このことからすると、制作時期の上限は、15世紀をさかのぼらないこととなります。つまり、原図があり、これを何かの機会に模写していると考えられます。では、次にその模写はいつな



図右上部分、東山あたり

端に少なく、荘園絵図は、ごく簡単に描いたものを含め、全国でも200点ほど知られるだけで、国の重要文化財に指定されているものも少なくありません。今後新たに数多くのものが発見される可能性は望めそうもありません。

長久三年「摂州細川荘大絵図」がもつ価値

この図において注目される点は、その制作が中世にまでさかのぼるかもしれないという希少価値と、本図から当初制作された時代の細川荘の様子を知ることができるところです。むろん、模写時に修正や加筆が行われた可能性を否定することはできません。しかし、細川荘の範囲を朱線で示し、河川や道筋、山や耕地の詳細な描写、大変美しく描かれた建物や木々、そして、何よりも現在既に失われた多くの地名や建造物が記載されていることは、その価値を損なうものではないと考えられます。

例えば、猪名川と久安寺川の合流あたりが「馬淵」、久安寺は元の名である「安養院」とし、今はない塔が描かれ、木部の北方には三重の塔をもつ「玉性院」という寺といった具合に、現在では知り得ない情報がこの絵図から読み取ることが出来ます。本図についての調査はその緒についたばかりです。今後どのようなことが分かるか大いに期待されます。

なお、本図は2月中旬から歴史民俗資料館で開催する「平成6年度新収資料公開展」で紹介する予定です。